

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 渡辺尚宏

論 文 題 目

Chemotherapy for extensive-stage small-cell lung cancer with idiopathic pulmonary fibrosis

(特発性肺線維症合併進展型小細胞肺癌に対する化学療法)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

横井香平 


名古屋大学教授

委員

安藤雄一 


名古屋大学教授

委員

清井 仁 

名古屋大学教授

指導教授

長谷川好規 

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、特発性肺線維症(IPF)合併進展型(ED)小細胞肺癌(ED-SCLC)に対する化学療法の効果と有害事象について検討を行った。その結果、1st line regimenの奏効率、median PFS、median OSはそれぞれ63.6%、4.7ヶ月、7.0ヶ月であった。有害事象の中で、胸部画像上新たな異常影の出現を認め、かつ入院を必要とした急速な(30日以内の)呼吸状態の悪化を”rapid deterioration”(RD)と定義したところ、1次治療中にRDは3例に認められ、うち2例は死亡した。以上より、IPF合併ED-SCLCに対する化学療法は、予後延長効果が期待される一方、RD発症には注意が必要であり、効果と副作用について十分に説明を行った上で化学療法を施行する事が必要であると考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 本研究の対象患者の%VC、%DLco、PaO₂の平均値はそれぞれ89.9±14.4、50.5±14.3%、74.3±13.7mmHgであり軽症～中等症のIPF患者を対象としていた。RD発症者と非発症者との間に統計学的な有意差は認められなかった。
2. 本研究におけるRDの発症率は27.3%(3/11)であり2例(18.2%)が死亡していた。これは通常の化学療法による死亡率が1%程度である事を考えると極めて高いと考えられる。一方でED-SCLCのBSC症例のmedian OSが1.9ヶ月との報告があり、本研究のそれは比較的良好である。治療選択肢が限られている現状と併せて考慮するとリスクは高いものの化学療法施行に一定の妥当性があると考えられた。
3. BSC群と治療群との比較試験は実行可能性が低いと考えられる為、まずは何らかの治療レジメンを検討する単アームの臨床試験を組む必要があると考えられた。
4. 小細胞肺癌は化学療法の有効性が高いため実地臨床において化学療法が施行されている事が多く、本研究の対象を集積した期間においてBSC症例は1例のみであったためBSC症例と化学療法施行症例とのデータの比較は困難と考えられた。
5. 肺癌診断前にIPがすでに診断されていた症例は11例中5例であった。RDを1次治療中に発症した3例は、2例はIPがすでに診断されており、1例は肺癌とIPが同時に診断された症例であった。
6. RDを発症した3例のうち2例に対してはステロイドパルス療法と抗生剤治療が行われ、1例に対しては抗生剤治療のみが行われていた。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	渡辺尚宏
試験担当者	主査	横井有平 安藤雄一 清井 仁		
	指導教授	長谷川好規 素		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 対象患者のIPFの重症度、肺機能について
2. 化学療法施行の妥当性について (RDの高い発症率・死亡率を考慮して)
3. 今後どういった研究が必要と考えられるかについて
4. 化学療法施行症例とBSC症例との比較について
5. 肺癌診断前にIPがすでにあった症例と、同時に見つかった症例との間でRD発症率は異なったかどうかについて
6. RD発症例の治療内容について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、呼吸器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。